



山川史著

## 留学生のソーシャル・ネットワーク形成 大学寮における経験的学び

関東図書、2018年発行、287p.

ISBN : 978-4-865-36046-2

芹川 佳子

### 1. はじめに

本書は、早稲田大学大学院日本語教育研究科において、2014年2月に受理された山川史の博士論文『短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成と日本語教育一寮という実践コミュニティの参加分析』をもとに刊行された。

山川はアメリカで日本語を教えていた頃に、日本語が上達するだけでなく、一回りも二回りも成長して返ってきた短期留学生に接し、彼らの留学体験を具体的に知りたいと思うようになった。その後、日本帰国後に短期留学生を受け入れる側の大学で働くようになり、短期留学生の留学における経験と学びについて探求したいと考えようになったことが、研究を始めたきっかけである。本書のタイトルでは「留学生」となっているが、博士論文のタイトルにあるように、留学期間が1年以内の「短期留学生」が研究対象である。本書は、「短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成の実態を明らかにし、寮という実践コミュニティへの参加過程における経験的学びを分析することにより、日本語教育が目指すべき方向について追及すること」(p. 5)を目的に行われた研究の成果をまとめたものである。

### 2. 本書の概要

本書は、2つの調査結果を含む7つの章で構成されている。

「第1章. はじめに」は序章である。短期留学生の増加と日本語教育の問題点に触れ、本研究の目的と意義、本書の構成を述べている。

「第2章. 短期留学プログラムと短期留学生」は、短期留学プログラムと短期留学生について説明した章である。留学生の自国の学習環境と留学先の学習環境や、留学の利点とマイナス点などを比較し、人が留学する理由を「言語を通した学びがあるから」(p. 14)と答えている。続いて、短期留学プログラムの位置づけを海外の大学での位置づけ、日本の大学での位置づけ、個人の中での位置づけの3つに分けて論じ、短期留学生の特徴と諸問

題について、長期留学生と比較して述べている。

「第3章. 学習観の変遷」は、本書の研究の立場を述べた章である。認知的アプローチに基づく学習観から社会的アプローチに基づく学習観へという、第二言語習得研究における学習観の変遷と日本語教育におけるアプローチの変遷を概観し、「短期留学生の学びというもの」を言語習得のみに焦点を当てるのではなく、日本語を学ぶことを通して何を学んでいるのかという、全人としての学習者の自己変容などにも焦点を当てる必要があるだろう」(pp. 33-34)と述べ、結果だけではなく、プロセスを重視することの必要性を主張している。また、短期留学生が属するコミュニティを分析する観点として状況的学習論を援用し、本研究の位置づけを行っている。

「第4章. ソーシャル・ネットワーク形成の実態」は、短期留学生のソーシャル・ネットワークの実態を捉えることを目的に行われた一次調査の結果とその考察の章である。はじめに、ソーシャル・ネットワークに関する先行研究を概観し、短期留学生のソーシャル・ネットワークの包括的研究の意義を述べている。次に、調査方法を説明し、包括的調査（東京都内の私立大学の短期留学生 35 名に行った質問紙調査とフォローアップ・インタビュー）、事例調査（包括的調査の調査協力者の中から 5 名に焦点を当て、フォローアップ・インタビューをもとにソーシャル・ネットワーク図を作成し、ソーシャル・ネットワーク形成の実態を分析）の結果を記述している。調査結果をもとに、短期留学生のソーシャル・ネットワークの構造と機能、ソーシャル・ネットワーク形成の意味、ソーシャル・ネットワークを変化させる可能性を考察している。最後に、短期留学生にとって重要なコミュニティとして大学寮を取り上げ、二次調査への示唆を述べている。

「第5章. 大学寮における経験的学び」は、第4章の調査結果で短期留学生にとって重要なコミュニティとして位置づけられた大学寮に焦点を当て、二次調査として大学寮における短期留学生の経験的学びについて記述・分析した章である。まず、大学寮に関する先行研究を概観し、大学寮が「生活の場」から「教育の場」へと位置づけが変化している現状において、短期留学生の視点から大学寮での学びの実態を明らかにする意義を述べている。分析対象は、第4章の事例調査で取り上げた5名の調査協力者へのインタビューと調査協力者が仲の良い日本人学生として紹介した友人2名ずつへのインタビュー、山川が記録したフィールド・ノーツである。分析の枠組みとして状況的学習理論を援用し、「短期留学生は、寮というコミュニティにどのように参加していったのか」「短期留学生は、その参加過程でどのように変化していったのか」「短期留学生と寮生との関係性はどのように変化しているか」「短期留学生の学びとはどのようなものか」の4点を分析の視点として、短期留学生の寮における経験的学びを明らかにし、実践コミュニティとしての寮の特徴と学びの意義について論じている。

「第6章. 総合考察」は、第4章と第5章の調査結果と考察をもとにした総合考察の章である。日本語教育の観点から「6-1. ソーシャル・ネットワーク形成におけることばの役割」「6-2. 実践コミュニティへの参加という経験的学び」「6-3. 実践コミュニティとしての大学寮の可能性」「6-4. 短期留学生に対する日本語教育を捉え直す視点」「6-5. これからの日本語教育アプローチ」の5点について総合考察が行われている。

「第7章. おわりに」は、本研究のまとめの章である。「短期留学生はどのようにソーシャ

ル・ネットワークを形成しているか」という研究課題に対しては、授業やクラブ活動、寮やアルバイトなどの複数のコミュニティに参加することにより、キャンパス内を中心としたソーシャル・ネットワークを形成していると答えている。時間の共有や共通の趣味、対等な関係性がソーシャル・ネットワーク形成の影響要因であることから、「短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成を促進するためには、短期留学生と彼らを取り巻く人々が接触できるコミュニティが提供されていること、また、そのコミュニティを通して短期留学生が彼らを取り巻く人々との程度時間を共有し、その中で親しい関係性を築いていけるような組織化された環境が必要」(p. 255)だと結論を述べている。

「寮というコミュニティの参加過程における経験的学びとはどのようなものか」という研究課題に対しては、「彼らの学びは多様であった」(p. 256)とし、「その学びというのは、知識の習得という狭義的な学びだけではなく、寮生として成長するという人間形成にも関わるような広義的な学びも含まれていた」(p. 256)と答えている。そして、「寮という実践コミュニティに十全的に参加することが、一人の大学生としての自信とポジションを獲得し、大学という、もう一回り大きなコミュニティへの参加にもつながっていたのではないか」(p. 256)と考察している。最後に、短期留学生に対する日本語教育および短期留学プログラムのあり方について結論を述べ、本研究の限界と今後の課題を記して、本書を締めている。

### 3. 本書の意義と課題

『平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果』(日本学生支援機構、2019、p. 11)によると、2017年5月1日時点で、日本の高等教育機関における留学生は208,901人おり、その内の18,673人が短期留学生である。長期留学生の人数に対して、短期留学生の人数は大した数ではないと思われるかもしれないが、前年は17,586人であり、毎年、短期留学生は増え続けている。しかし、短期留学生は学位取得を目的とする長期留学生とは異なり、キャンパス内では他の学生とは学習面や生活面で別々に扱われ、「一時預かり」「お客さんの存在」として扱われる傾向がある。これに対し、山川は「短期留学プログラムは留学期間は「短期」であるものの、短期留学生の人生設計においては「長期」的な影響を与えるものなのである。(中略)実は日本との「長期」的展望にたった関わりを選択する誘因となっている」(p. 18)と述べ、「短期留学プログラムが将来的に各国と日本との友好関係に果たす役割は大きい」(p. 19)と主張している。短期留学生が今後も増え続けること、長期留学生や日本企業への就職などの形で日本へ戻ってくることなどを鑑みると、短期留学生を取り巻く環境や課題は、重要な研究テーマである。

従来、留学生などの日本語学習者のソーシャル・ネットワークを研究したものは、日本語学習者が日本語母語話者と形成するソーシャル・ネットワークに関する研究が主流であった。しかし、山川は「短期留学生を取り囲むソーシャル・ネットワークの実態を包括的に捉えるためには、日本人以外の人たちも積極的に含めるべきである」(p. 69)とし、日本人に限定せずに、調査協力者に生活の中で定期的に接触する人を挙げてもらうことで、日本人以外の人物がソーシャル・ネットワークの約半数を占めていることを明らかにした。

これにより、短期留学生在が形成するソーシャル・ネットワークの実態とその特徴が明らかになった。日本人かどうか、日本語を話す間柄かどうかに関係なく、調査協力者が形成しているソーシャル・ネットワークを分析するアプローチは、長期留学生や外国人定住者の生活支援や日本語学習支援などを検討する際にも役立つ手法である。

また、短期留学生にとって重要なコミュニティとして位置づけられた大学寮は、「生活の場」とどまらない「教育の場」であり、学びが実践に埋め込まれた実践コミュニティとして機能していたことを明らかにしている。さらに、寮での学びには、日本語母語話者と生活を共にする中で日本語の知識が得られるという、日本語の上達に特化した狭義的な学びだけではなく、「参加形態の変化」「活動への理解」「アイデンティティの変容」といった人間形成にも関わるような広義的な学びも含まれていた。これにより、以前から「教育の場」として位置づけられていながらも、明らかにされてこなかった大学寮での経験的学びについて、具体的に明らかにすることに成功している。これらの研究成果の背後には、これまでは短期留学生の個人レベルの問題や、言語・文化の問題として扱われがちであった短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成を、短期留学プログラムとの関連で捉えなければならないとする山川の主張が貫かれている。本研究成果は、短期留学プログラムを提供する大学関係者だけではなく、短期留学生と直接関わることが多い日本語教師や支援者、日本へ送り出す側の大学関係者にも意義ある研究成果である。

しかし、山川自身も述べているように、日本語教育実践の示唆はあるものの、具体的な実践についての記載がないことが欠点である。正宗（2015）は、寮が日常生活の日本語を使う場、授業で習った日本語を応用する場になり、日本語力が向上している留学生在がいる一方で、寮内で日本人との接触機会に恵まれない留学生在がいることを調査から明らかにし、「日本語に接する平等な機会の提供と言語面でのサポート及び教育的機能」「日本語上級者には学術的なテーマなどについて議論し合う機会の提供」（p. 71）を提案している。山川が日本語教師の知見から、寮での日本語力向上について、どのような実践や提言を行うのかに興味があるが、記載がなく、残念である。

また、山川が最終的にインタビューの分析対象にした5名の短期留学生は、2011年3月の東日本大震災を体験しながらも、中には一時帰国をした者もいるが、日本へ戻ってきて、最後まで短期留学をやり遂げた留學生達である。彼らは留学に対する目的意識が高く、いわゆる短期留学の成功者に分類される存在である。また、研究対象となった大学の短期留学プログラムでは「日本人との混在寮」と「日本人と共に受講する授業」が提供されている。インタビューでは、日本人との距離が近い留学プログラムに魅力を感じて留学先に選んだと述べる短期留學生もいることから、彼らの留学に対する目的意識の高さがわかる。しかし、短期留學生の中には、日本へ行きたい思いが先行するあまり、短期留学プログラムと自らの留学ニーズをマッチングさせることなく留学先を決めたり、日本に滞在しただけで満足してしまい、旅行者気分がなかなか抜けない短期留學生もいる。受け入れる大学側も、大学の規模や設備面から「日本人との混在寮」を十分に用意できなかったり、「日本人と共に受講する授業」が提供できなかったりする短期留学プログラムも存在する。短期留學生のソーシャル・ネットワーク形成を短期留學生個人の問題ではなく、短期留学プログラムとの関連で捉えるならば、条件が良くない短期留学プログラムに対して、山川

がどんな改善策や代替案を提案するのかを読んでみたかった。「多様なバックグラウンドを持つ短期留学生が日本で充実した留学生活を送れるよう、今後も彼らに対する日本語教育に携わり、そのあり方を考え続けていきたい」(p. 260) とする山川の今後に期待する。

#### 4. おわりに

現在、筆者は短期留学生を送り出す側の海外の大学で日本語を教えている。国へ戻った短期留学生の留学先での体験的学びは、後輩の留学希望者への参考になるだけではない。大学での日本語や日本文化の授業の中で、留学の体験的学びを通じた視点から発せられる意見は、留学経験がないクラスメイトに新たな視点を与える。しかし、帰国後に有意義に活用される体験的学びを得るためには、日本での充実した留学生活が必要である。充実した留学生活を送るためには、学生本人が明確な目的意識を持っていることが前提ではあるが、短期留学生の留学目的や学習目標に応えられる短期留学プログラムが必要である。

受け入れる側や送り出す側であっても、日本語教師が短期留学プログラムに意見できる機会はほとんどない。しかしながら、教室内でいかに効率よく日本語を教えるかという「狭義の日本語教育」(尾崎、2001)ではなく、「広義の日本語教育」(p. 257)を提供するという視点は、これからより重要になる視点である。山川が提言する「広義の日本語教育」とは、日本語の授業を行う教室の機能を再考した上で、学習者一人一人を全人的に捉え、日本語ということばを通して人やコミュニティとつながり、関わっていくことを目的とする教育である。短期留学プログラムを提供する大学関係者だけではなく、日本語教師や支援者、日本へ送り出す側の大学関係者などが、それぞれの立場から留学プログラムの充実に向かって、連携して役割を果たすことが、これから益々求められる。

#### 参考文献

- 尾崎明人 (2001) 「日本語教育はだれのものか」 青木直子・尾崎明人・土岐哲 (編) 『日本語教育学を学ぶ人のために』、世界思想社、pp. 3-17
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2019) 『平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果』  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2018/\\_icsFiles/afldfile/2019/01/16/d\\_atah30z1.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/_icsFiles/afldfile/2019/01/16/d_atah30z1.pdf) (2019 年 8 月 28 日)
- 正宗鈴香 (2015) 「寮生活における留学生の異文化社会適応、人格形成、言語習得に関する事例研究：国際寮の教育的機能の可能性」 『麗澤大学紀要』 98、pp. 63-72

(せりかわ よしこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士後期課程)